



# 谷口博文の政策イノベーション

Date : 2019年 12月31日

## No.044 イノベーターと「現状満足階級」との戦い コンプライアンスのジレンマ



多くの日本人は子供の頃から「きまりを守ること」「他人に迷惑をかけないこと」を厳しくしつけられてきました。「世間の秩序を乱すことは悪いことだ」「もし人に迷惑をかけるようならルールができるまで待つべきだ」そういう空気の中で、既存秩序に触れそうな新しいことを始めると、イノベーターたちは世間から猛烈な反撃を受けます。他人に迷惑をかける厄介者と眉を顰める人も多いわけです。

私はこの対極にあるのがアメリカだと思っていました。世間を気にせずにまず行動してみて、以前よりいいサービスであればすぐに受け入れるのがアメリカ社会だろうと。ところがそのアメリカですから「現状満足階級」なるものが台頭して格差と停滞を生んでいると、ジョージ・メイソン大学のコーエン教授は指摘しています。「安定・安全指向が強く、変化を嫌う現状満足階級が、分断を拡大させイノベーションを減退させる…」(「大分断」NTT出版より)

法令は安全・安心・安定を具現化する最も有力なツールです。コンプライアンス(法令遵守)に対しては誰も異論を唱えません。しかしそれが社会の停滞をもたらすとすれば、どうすればいいか…

アメリカやイギリスのような法体系の国は、重要な原理原則(プリンシップ)をベースにして個別ケースに柔軟に対応する考え方があります。これに対して日本のように箸の上げ下ろしまで細かくルール化する大陸法系の国は融通が効きません。

私はプリンシップ・ベースのルール作りがイノベーションにとって大事ではないかと考えています。ただし規制する側にも規制される側にもリスクがあり、自分で責任を取る自律的な精神が社会に求められます。

どんなに安全・安心・安定を望んでも、リスクのない社会はありません。むしろ今世界は分断と不安定化の方向に向かっています。一定のリスクを許容するルールづくり、これが私の今年の研究テーマです。